第１章　フレンズの国々

緑の線路

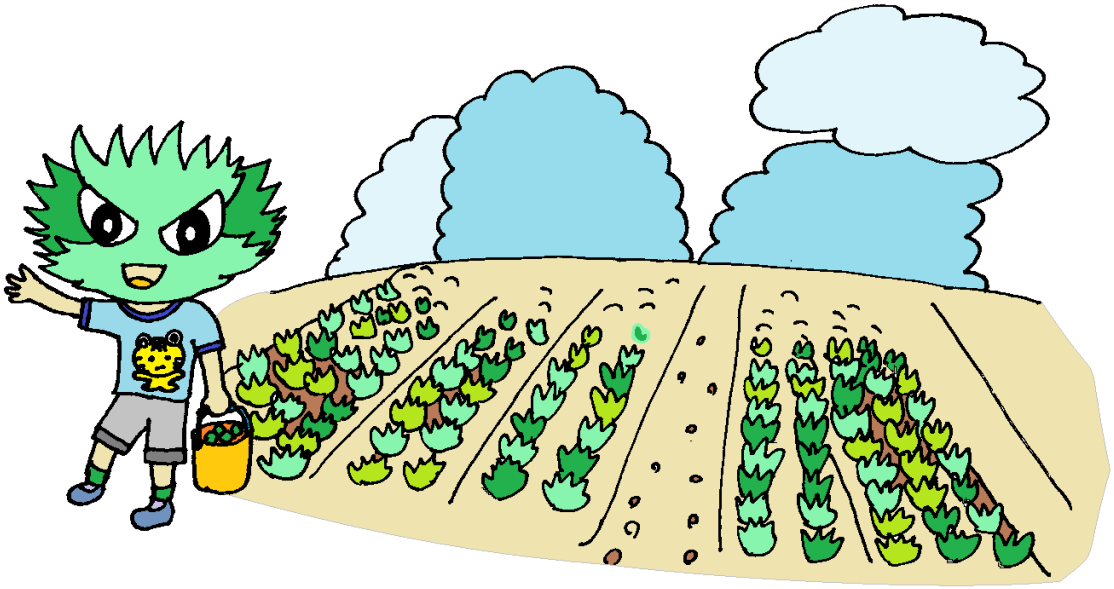
エイミー、バーバラ、トミーはトマトの子の後ろについて、レタスのような野菜が育っている畑の中の道を歩いていきました。見渡すとあたり一面緑ですが、エイミーたちの国の風景とは少し違います。

「ほら、あそこを見てよ、エイミー、バーバラ・・・」

「なによ・・・」

エイミーとバーバラはトミーが指差す方向に目を向けました。

「わっ、あれなに？レタスが歩いてる」



バーバラが少し驚いた顔をして、少し首をすぼめていいました。先導していたトマトの子も足を止めて、なにやら手まね身振りでいっています。別の子が一人近づいてきたからです。

『やぁトナ、どうしたのヒューマンの子を連れて・・・』

前から歩いてくるまるでレタスのような顔の子は、トマトの子に手を振り話しかけました。背たけはトマトの子よりすこし低いようです。

「あれ、あの子はしゃべってるわ」

トマトの子の前でこっちを見ながら話をしています。その子がやってきました。

『やぁ、こんにちわ。オレッチはレタってんだニ』

「よ、よろしく。というか、あんた話ができるのね。あたい、エイミー。エイミー・フォーリーブスよ」

エイミーがそのレタと名乗るレタス君にあいさつし握手をしました。

「あたしはバーバラ。バーバラ・オリオンっていうの」

「お、おいらは、トミー・ラデッシュ。で、君はおいらと同じ男の子かい？」

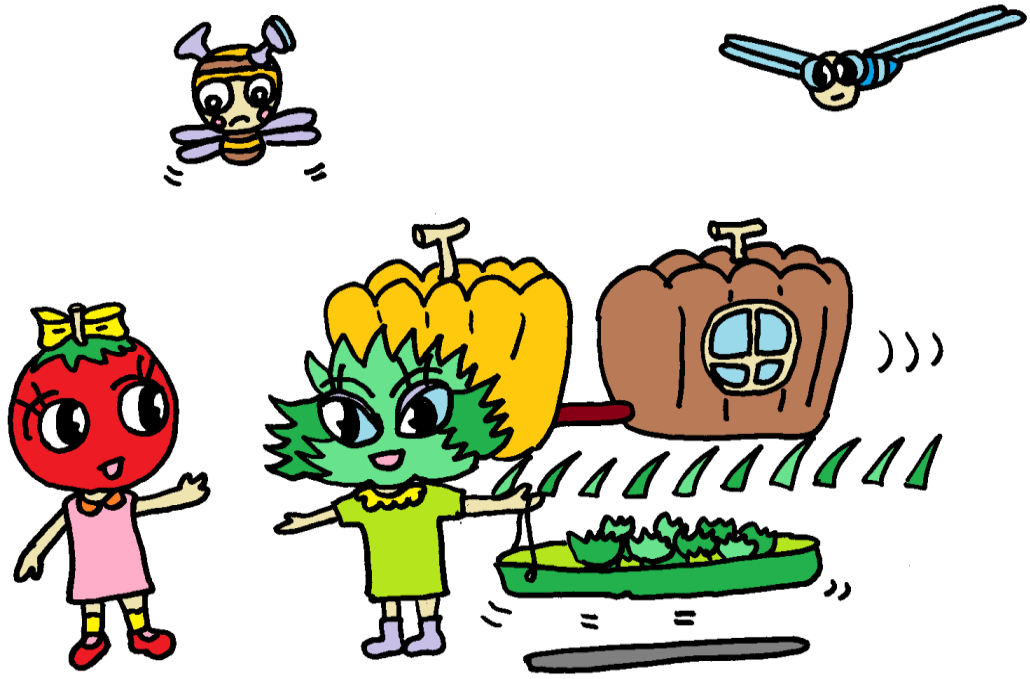
『オラッチ？オラッチが子供？その子供でもないんだけどニ。まぁいいかニ？ようこそフレンズの国へだニ』

「フレンズの国？」

エイミー、バーバラ、トミーが一緒になって声をあげました。

「フレンズの国って、ここのこと？」

トミーがレタに質問しました。



『まぁだんだんわかってくるからね。とにかくようこそオレッチの国へだね。いろいろと案内するよ。トナももう話ができるニ』

『うん、そうね。やっと話ができるトナ』

「あら、お話しができるんじゃない」

エイミーがそのトナという先ほどから一緒にいるトマトの子に向かっていいました。

『エネルギーの関係でこの世界に戻ったからお話ができるトナ。あたしはトナって呼ばれてるトナ』

「さっきのみかんみたいな子は？」

トミーも聞きました。

『葉っぱを持って戻ってきたわ。ほらあそこ』

トナが指差すと、みかんの子がさっき雑木林の中で乗った大きなハスのような葉を何枚も浮かせて持ってきました。

『ごめんね。あっちの世界では声が出ないの。わたしはデコ、ポン』

「なんとかだニとかトナとかポンっていったいなに？」

トミーが変な言葉使いに少しとまどっています。

「それにしても葉っぱが浮いているので持って来るのも簡単ね」

エイミーがその様子を見ながら納得していいました。

『さぁ、これに乗って王様のところへ行くだニ』

レタが指を高く上げていいました。一番先頭のレタに続いて、エイミー、バーバラ、トミーが別の葉に乗り列になります。最後にみかんとトマトの子が連なり、6 両の列車のようになりました。

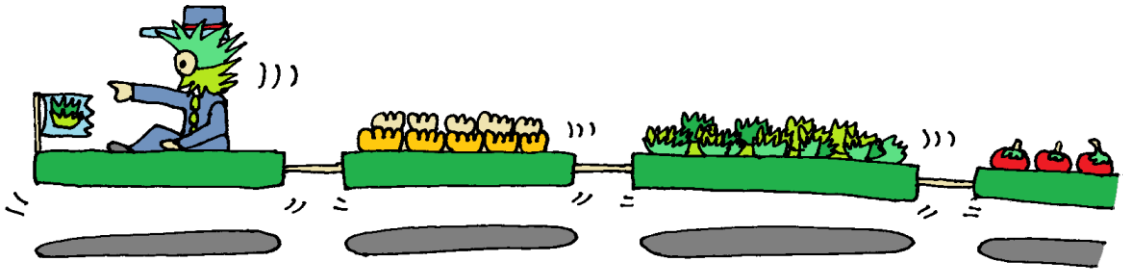
「いざ～～っ、出発進行～～～っ！」

今度はトミーが大きな声で叫んでいます。ハスの列車は音もなくレタを先頭に 6 つの葉が連なっています。畑に沿って芝生のような緑の道があります。まさに緑の鉄道といったようなものでしょうか。その上を 6 つのハスの列車が 10cm ほど浮いてゆっくりと移動していきます。

「それにしても一面の緑ね」

エイミーが後ろのバーバラの方を振り向いていいました。

「ほんとうにみごとな緑だわ」



バーバラも感心して思わず笑みをこぼしました。少しして緑の線路が平面交差しているところに来て、トナが止まりました。それに続いてほかのみんなの葉も停止しました。見ると右の方からもっと大きな葉の長い列車がやってきました。先頭ではレタと同じようなレタス君が先導し、赤やオレンジや多くの色とりどりの荷物を運んでいます。

「ずいぶん長いなぁ」

トミーがいいました。長い列車が通りすぎ、再びレタたちの両の葉の列車も動き始めました。程なく緑の線路が広くなり、少し速度が上がってきました。

『時速 50 キロリーブスで進行 OK だニ』

先頭のレタが何やら標識のマークと記号を指さしていいました。1 リーブはハスの葉の直径で、偶然ヒューマニーワールドの約 1 メートルと一致しています。時速 50 キロリーブスは時速約 50 キロメートルとなります。レタが時速 50 キロリーブスといってから移動速度が上がりました。さっきは時速 20 キロリーブスくらいだったようです。線路の幅は先ほどより広く反対側からも同じような別の列車がやってきてすれ違います。広い道は両側で 4 車線の高速道路といった感じです。左側を後ろから少し大きな 1 枚の何も乗っていないハスの葉がやってきて追い抜いて行きます。

「一面、野菜畑だけど未来の交通機関みたいだね」

トミーが前にいるバーバラに向かって、少し興奮したようにいいました。

「そうなんだよね。こっちの世界の方が自然が豊かなだけでなく、科学も自然に進歩しているみたい」

バーバラもトミーの方に振り向いていいました。6 つの連結のハスの葉は広い緑の線路を距離にして 10 キロリーブスほど移動し、また速度を落として分岐した一車線の道に入りました。しばらくして緑の畑から森の中に入って行きました。

レタチンの長老

『さぁ着いたニ』

先頭のレタが止まり、葉から降りてエイミーの方を向いてみんなにいいました。

「どこに来たっていうのさ、エイミー」

「バーバラ、そんなの私に聞いてもわからないわよ」

ハスの葉を置き少し歩いていくと森の中の小さな広場に出ました。大きな切り株を中心に皆がなにやらガヤガヤ騒いでいます。

「なんかベジタブルな雰囲気だね」

トミーがエイミーとバーバラにいいました。

「ベジタブルな雰囲気というより、ベジタブルそのものって感じだけど・・・」

バーバラが答えました。

「しっ、何か話しているわよ」

『お、おぉ〜〜〜』

『ほ、ほんとうだ！よ、予言は当たっているトナ！』

『しっ、静かに・・・。ということでオレッチのいった通り、このようにゴッドを連れてきたニ』

レタは切り株の上に立ってみんなに向かっていいました。

『ここにいる彼らが３人の勇者であり神の使い、女神なのだニ！』

『オォー、さすがにレタだ！ほんとうに女神を連れてきたトナ』

『よし、これで怖いものはないぞニ』

皆は口々に叫びました。

「なんかおいらたちとんでもないことになっているよ」

トミーがエイミーとバーバラの顔を見ていいました。

「そうみたいね。でも女神って誰のこと？」

さすがにエイミーもそう答えるのが精一杯です。

『でかした、レタよ！しかしまだ本当の女神・勇者かどうかはわからんニ。そうでなければ早々にヒューマンの世界に帰ってもらうしかないトナ』

その大きな切り株の向こうからひげを生やした人がいいました。

「さすがに長老だけあって、レタチンとトナトンの方言が混ざってるニ、いや、混ざってるね。おいらまで移っちゃいそうだ」

『ささ、トナどの』

『長老、ここにその病人が来ていますニ』

一緒にハスの葉に乗ってきたトマトの子がトナです。彼女が長老の隣にいるトナと同じトマトの顔の子を指さしていいました。

『彼女は少し元気がないのじゃニ。今までなかった病気になっているのじゃニ。予言では３人の女神と勇者が差し出す薬でこれが治るといわれているのじゃ。もしそれがお前たちであれば、彼女を救うことができるはずじゃトナ』

「んなこといってもねぇ。あたしたち、ただのヒューマンのしかも子供だし。神じゃないし・・・、ねぇ、エイミー、トミー」

「う、うん、バーバラ。あたしたちじゃぁ、なんにもね・・・。・・・ん、あんた、トミー？なにやってんの？」

トミーはなにやら自分のリュックサックの中から探し物をしているようです。

「あ、あった、あった。これだよ」

と言って、トミーは食べることのなかった食料を取り出しました。

「あんた、なにやってんのさ？」

バーバラがいいました。

「何って、トマトのような子だから、元気になるようにトマトをあげようかと・・・」

「あんた、バカじゃないの。だって薬が必要だっていってるのにトマトなんか・・・」

バーバラが毎度のようにトミーの頭を小突きながらいいました。

「だ、だってさ、どうせ勇者じゃなかったら早く帰れるしさ。どっちでもいいじゃん」

「た、確かにこの際、何にもしないっていう雰囲気じゃなさそうだし・・・」

エイミーもバーバラの顔を見て、そしてその長老に向かっていいました。

「これは私の家で作っているトマトと言う薬にもなる食べ物です。これを食べてみてください」

そういって、トミーの手から１つのトマトを手に持ち、長老に渡しました。

「エイミー、あんた、そんなことしてだいじょうぶ？」

「なぁ～～に、いいって、いいって、トミーのいう通りかもね。もう早く帰らないといけないし・・・、ねっ、バーバラ」

「そういうことか・・・、トミー、あんたもなかなかやるね。早く帰ればいいのね」

そいうって３人は顔をみて少し微笑みました。

『オ、オォ～～、ちょ、長老・・・だニ・・・』

なにやらレタが叫びました。その病気のトマトの顔の子がエイミーの渡した小さな赤いトマトを口に合わせたかと思うと、そのトマトは小さくしぼんでしまいました。その後、その子は目を大きく見開き長老の顔を見ていいました。

『オイチイ！』

長老、レタを始めみながその子をじっと見ています。もっとほしそうな感じなので、エイミーは今度は別のもう少し小さな黄色と白いトマトをその子に差し出しました。

『オイチイ！オイチイ！』

「なんかよろこんでるね」

トミーがいいました。

『おぉ〜〜、見ろ。あの子の顔がつやつやと元気が出てきた感じだトナ』

その場にいた別のひとりがいいました。

『どうじゃな？少しは良くなったかなニ？』

長老がその子に聞きました。

『うん、おいちいお薬だったよ』

そういうと立ちあがって、走ってその場を離れてどこかへ行ってしまいました。

『見よ！このヒューマンたちが持ってきた薬はやはり本物じゃ。勇者よ、いや神よ、疑って申し訳なかったニ。いや、すみませんでしたニ』

長老はバーバラの方を向いてこういいました。

「まぁそりゃぁね、治ればよかったんだけど・・・ね、エイミー」

『ほんとうにオレッチの言った通りだっただろ。勇者が来たんだニ』

『レタのいう通りじゃ。みなで彼らを迎え入れることにしよう』

長老はレタを目の前にして、その場にいる皆に向かっていいました。

「ま、まさか、あれってただのトマトだぜ。・・・でもおいらたちそれじゃあ、帰れなくなっちゃうぜ」

エイミーたちの行った世界は、それはそれは平和な暮らしが続く3つの国が近くにありました。北にはレタス君たちの住むレタチン連邦、南にトマトの子が住むトナトン王国、海をへだててみかんの子が住むオレンシア合衆国は、それぞれ暑くもなく寒すぎもせず、1年を通して穏やかな四季に恵まれていました。

『それでね、トナの国が心配なの。こうしてレタやデコも心配して来てくれて、いろいろとお手伝いしてくれているトナ』

『そうなの。トナトン王国がおかしくなったからみんなで調査していたポン』

トナはトナトン王国の王女だったのです。そのようすを知るために、今レタチン連邦にいるエイミーたちはトナの国であるトナトン王国へ出発することになりました。

いざトナトン王国へ

「なりようにまかせて、とんでもないことになってきたわね」

エイミーがバーバラとトミーに向かっていいました。

「でもトナの悩みも聞いてあげたいし、ねっ、トミー」

バーバラがいいました。

「もちろんおいらは大賛成だよ。でも、どちらかというとバーバラが早く帰ろうっていうかと思ってさ」

「そう、他の国へ行くんだったら時間がかかるし。私たち明日は休みだけど、月曜日はまた学校があるのよ。ねっ、バーバラ」

「そ、そうねぇ、た、たしかに学校があるし・・・」

「あれぇ、なんか、バーバラ、歯切れが悪いよ。だっていつもこういうの一番最初に反対するもんな」

「そ、そうかしら・・・」

「あっ、わかった！月曜は父兄参観日なんだ。バーバラはお母さんがオリオン先生だから嫌なんだよ。去年もそうだったし」

「そ、そう。月曜日が休みになるといいわね・・・」

「なんだそんなこと。あたいなんかうらやましいわ」

「ご、ごめん。そんなつもりでいったんではないわ、エイミー」

エイミーは父兄参観日にお母さんは来ません。いつも来るのはアンおばあさん１人だけです。

「おいらもごめん」

「ううん、いいのよ。だいじょうぶ」

『学校のことなら心配いらないよ。君らがあの林に帰ったらわかるけどニ、行ったその時から 10 分と経っていないはずなんだニ。だからこちらに何日もいてもその土曜日に家に帰るんだニ』

「えぇ〜〜、どういうこと？」

3 人は口をそろえていいました。

『言うなればオラッチの世界は君らから見ると、仮の世界のようなものなんだニ。このように実際に経験するし夢ではないだニ。転ぶと痛くてケガをするけど、向こうの君たちの時間には関係ないんだニ』

「なんかすごいというか、わけがわからないわね、バーバラ」

「そ、そうね、良かったと言うか、少し残念というか・・・」

「でもよかったじゃん。だって帰っても次の日も休みだからって思うと・・・」

「ま、そりゃ、そうだわね」

エイミーとバーバラはお互いの顔を見てトミーのいう通りだとうなずきました。

『じゃあ、すぐに出かけるけど、トナトンへはレタチン川を下って、グリーンタートル船で行こうよ。夕日のいい景色を見ながらこの船で寝るんだニ。後の平原はホースアニマルに乗って 2 時間くらいでいけるよ。お昼にはトナトンだニ』

レタはいいました。

「そんない１日もかけていくの？来たときみたいにトンボのでかいのに乗ればすぐじゃんかよ」

トミーがレタに質問しました。

『空はね、バッドバード（悪い鳥）に襲われる危険があるんだニ。もちろん早く着けるけど、緊急以外は空は飛べないんだニ』

レタが説明しました。この後すぐに、お客様専用の高速馬車がやってきました。

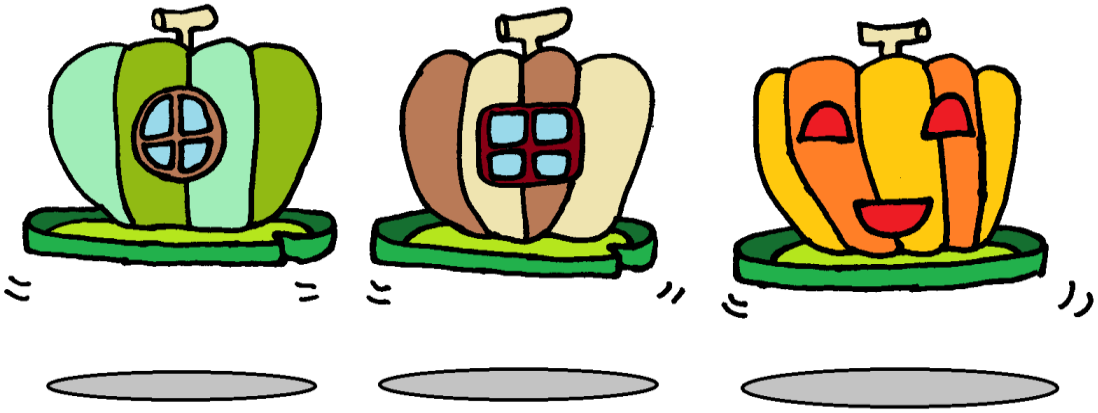
『馬車が来たニ』

レタがこの林の中に入ってきた馬車を指さしていいました。

「えぇっ、馬車って大きなかぼちゃみたいだぜ」

トミーがびっくりした顔で叫びました。

『だいじょうぶトナ。あれが私たちの高速移動手段トナ。後はお供の者もついてくるから３両の列車で出発するわ。私たちは一番後ろの車両よ。さぁ乗ってちょうだいな』



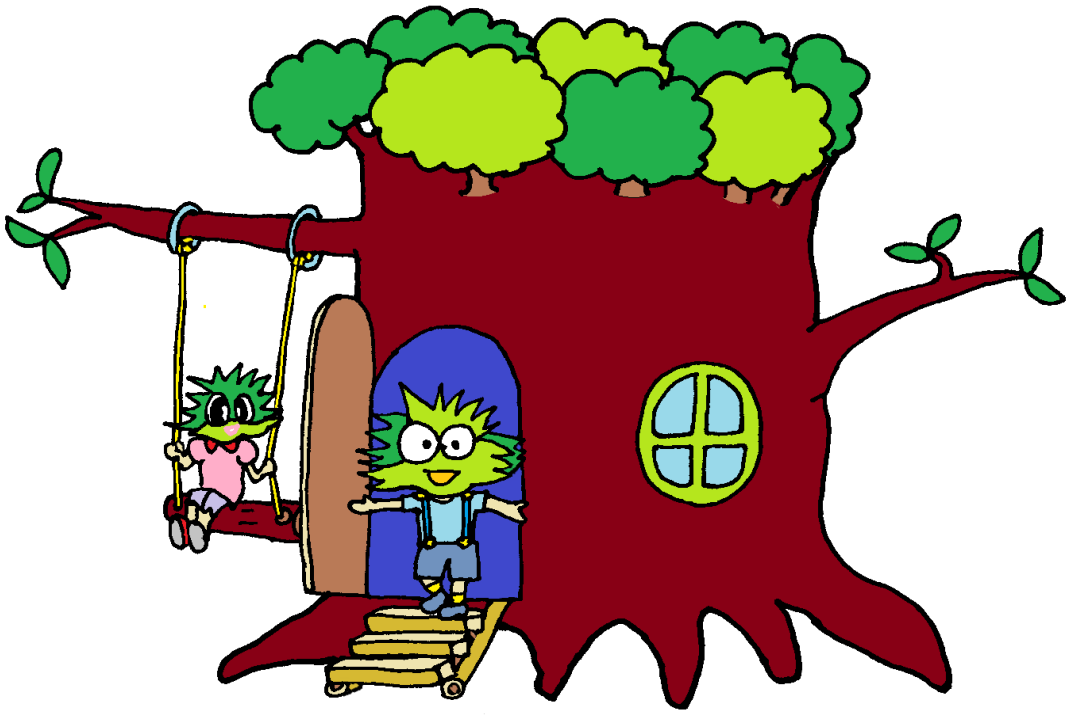
「ハローウィン？」

まずはタートル船の出る湿原に向け出発です。林を抜けると町が見えてきました。町に入りしばらくゆっくりとフレンズの国の街並みを眺めながら、馬車は浮きあがり静かに進みます。

「なんだか木の家ばかりね」

エイミーがいいました。

『そう本物のウッドハウスだよ。木や草で出来た家しかないんだよ。ボクたちの国はウッドが多くて、トナトンに行くと草が多くなるよ。気持ちのいい世界なんだ』



レタは説明しながら、大きく深呼吸をしました。

『エネルギーはすべて自給自足なのよ』

トナが話を始めました。

『家そのものがエネルギーを作ったり、空気もいつも新鮮に入れ替わるトナ』

「私たちの家では電気がエネルギーだけど、ここでは何を使っているのかしら？」

エイミーが質問しました。

『また後で話しをするけど、それが問題になっているトナ。私の国に行ったらわかるトナ』

しばらく馬車は街並みの中をゆっくりと移動していましたが、郊外へ出て少し速度が上がってきました。

『もうすぐ高速道路を走って川を目指すからニ。ウッドの香りからグリーンの香りへの変化が気持ちいいだニ』

レタが説明しました。

『街のウッドから緑のレタチン畑に変わる風景は、いつ見てもいいポン。私の国のオレンジ色とは正反対の緑色もすてきポン』

デコがレタの方を向いていいました。

『まだ名前だけしか言っていなかったポン。自己紹介するポン。私はオレンジア合衆国から来たのよ。今度はあなたたちを紹介してくれるかしら？』

こういってエイミーとバーバラ、トミーが順番に自己紹介をしました。

タートル船で

レタチンのウッドハウスは北国のナチュラルウッドを、生きたまま利用します。こうすれば、空気の入れ替えや温度調節はウッドが行ってくれます。住人はウッドのことをハウスゴッド（家の神様）と

して祭っています。ウッドそのものが生長するので、10 数メートルもあるウッドハウスもあります。

ここでは家族が一緒になって暮らしています。エネルギーの自給自足がとても大切です。大きな発電所がないからです。だからウッドの自然の力を効率良く使いエネルギー源とします。そのエネルギーでレタチンを育てたり、光からエネルギーを取ることができるブルーモスを周りに敷き詰め発電機のように利用したり、いろいろな方法でエネルギーを作っています。

またフレンズは直接、太陽の光、周りの熱、草木自然エネルギーを自分のマインドエネルギーに変えて生きています。

『いいグリーンの香りだニ』

レタがいいました。

「私たちの国とはやっぱ、風景が違うわね、バーバラ」

「違うも何も違いすぎるわよ。だって馬車が浮いているのよ」

「おいらの村も空気がいいけど、なんか頭が冴えてきそうな感じの空気だね」

馬車は郊外の畑を、いよいよ高速モードで走行します。ゆっくりと揺れながら動いていた馬車が一旦、停止しました。

『高速走行モードへの切り替えのために、5 分間停止するインコ』

運転手のアナウンスがありました。先頭の馬車に 3 両のパンプキン客車が連結されています。1 つの客車には 6 名が乗車できます。レタたち以外に、10 数名の客も他の客車に乗っています。

『それでは、ただ今から高速運転で出発するインコ』

先ほどの運転手から再度アナウンスがありました。馬車はその支えてきた車輪を車両内に格納し、全ての車両は地面から 30 センチメートルほど浮き上がりました。

『出発進行！』

運転手のレインボーインコの声とともに汽笛の代わりにベルをチンチン鳴らし、ゆっくりと動き始めました。馬車の下にはエネルギーを供給する、5 ミリメートルほどの厚さのブルーモスが敷き詰められています。ブルーモスは時々光を放ちながら、馬車を目的の方向へ移動させていきます。

「ビッグロックシティのチンチン電車のようだね」

『ここからは高速運転になるトナ』

トナがいいました。パンプキンの列車はますます速度を増し、近くの景色はあっという間に後ろの方に行ってしまいます。

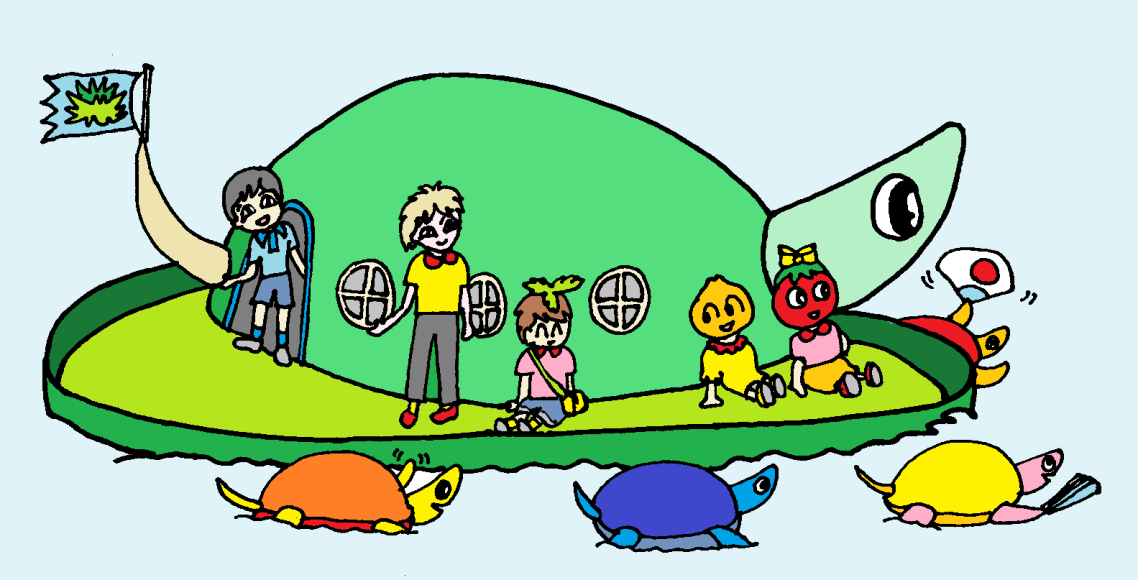
「しかしこう速くては景色も何も見えないわね」

エイミーがいいました。

『せっかくなのでこの景色も楽しんでね。これが自慢のオラッチの国の景色なんだニ』

「そうそう、レタ君の国ともお別れだから、しっかり見ておこうね」

トミーが前に腰掛けているレタに向かっていいました。こうしてエイミー、バーバラ、トミーの 3 名と、レタ、トナ、デコと合計 6 名を載せた馬車は、お供の者とレタチン連邦を縦断し、王国との境をなすレタチン川にやってきました。まだ陽は高い時刻です。6 人とお供のものはタートル船に乗り込みました。タートル船は 6 匹の熟練タートル船頭が操船します。左に曲がるとり舵のときは先頭の左側のタートルが、右に曲がるおも舵の時は右側のタートルが扇子を出して合図するようです。平原まで約 100 キロリーブスあります。途中で船頭は 2 回交代して川を下って行きます。最後はトナトン王国との国境です。船はここまで人々を運んでいきます。



『出発進行！』

今度はレインボーチキンが汽笛を鳴らしました。

『さぁ、船が動いたぞ。少し休むことにするだニ』

レタがそう言うとお供のものも横になりました。変わって行く風景は今度は葦（アシ）のような木の生い茂る湿原を進みます。もう夕

暮れです。美しい星空を見ることもなく、6 人はしばらくの間このタートル船で眠りにつこうとしています。

「きれいな竹の寝室で気持ちいいや」

トミーがいいました。

「そうね。少し疲れたわね。すぐに休まないとね、バーバラ」

「そうね。それにしても周りはにぎやかなのね」

『そりゃあそうだよ。ここは交易の船だからニ。とってもにぎわっているニ』

レタがいいました。

『レタチン人だけでないポン。あれはトナトンの人でしょう。赤い首のレタチン人もいるポン。あれは私の国の人よ』

デコもひとこといいました。エイミーたち 3 人は、物めずらしさに少し興奮しながら、疲れていたので深い眠りにつきました。

『コッカ・ドゥードゥルドゥー』

『だんな、着きやしたぜ』

船長のレインボーチキンの声に 3 人は目をさましました。

『だんな、レインボーな朝でっせ』

『もうなんじトナ？』

ただいまの時刻は、ちょうど 1 ホワイトチキン（約 5 時から 7 時の間）でっせ』

『そうぴったりだニ。さあ飯を食って出かけるとしようニ』

「それにしてもレインボーなのが運転手とか先緒をやってるね」

トミーがなぜか感心していいました。レタたち 3 人はそれぞれ持ってきた弁当箱のふたを開け、水筒の水を入れると反応してエネルギーが多い食事になります。

『レタチンはその人気商品のアイアン・ファーテが好きトナ？』

横に座っているトナがレタにいいました。

『そうだニ。強くなるにはアイアンを多く摂るように母から教わったもんニ。小さいころからこれが大好きだニ』

「おいらたち、おなかがすかないぞ。もう夜だというのにね」

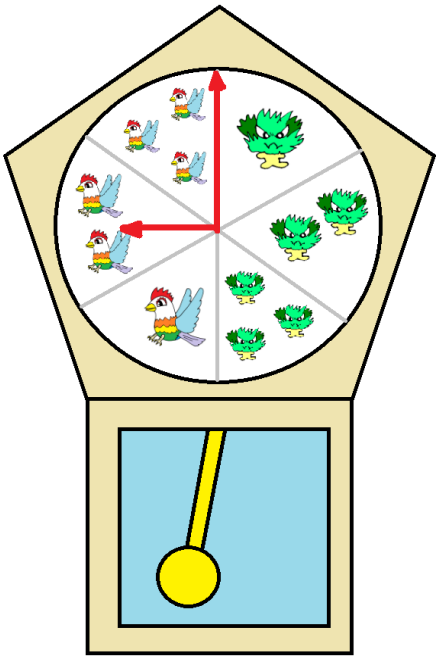
トミーがおなかがすかないことに気がつきました。そうですこの世界の食事はエネルギーです。空間に満ちたエネルギーを呼吸するように補給します。ただしフレンズも足りない栄養分の補充のためこのような食事を時々します。

「便利って言うか、楽しみがないわね」

バーバラは食事が好きなので、少し残念そうです。

『あたちもごはんにする』

船長の子供はまだレインボーではないようですね。



<注：レタチン連邦の時刻>

午前 6 時～8 時＝1 レインボーチキン

午前 8 時～10 時＝2 レインボーチキン

午前 10 時～12 時＝3 レインボーチキン

午前 12 時～午後 2 時＝1 ライク

午後 2 時～午後 4 時＝2 ライク

午後 4 時～午後 6 時＝3 ライク

午後 6 時～翌午前 6 時＝ノーライク

※ノーライクの時間は暗いので嫌いなんですよね。

フレンズの国の四季

『トナトンの町が見えてきたわよ』

トナがいいました。

『異国情緒にあふれ、あいかわらずカラフルな国だニ、ここは』

レタがデコに同意を求めるかのようにいいました。

『そうポン。田園風景のレタチンと違い花が多いポン。でも私の国のオレンシアは暖かいからもっと大きな花があるのよ』

「へぇ、それにしてもお舟の後は今度はゆったりとした馬車とは、本当に優雅でいいわね」

バーバラがエイミーの顔を見ていいました。6 人は順調に旅をつづけたので、翌日の 2 レインボーチキンを過ぎたころ（午前 9 時過ぎ）に、王宮へ到着することができました。

『レタチン連邦からの使者なぁ～～～り～～～』

『あれが勇者トナ？』

『いや神トン！』

『そうだ女神トン！』

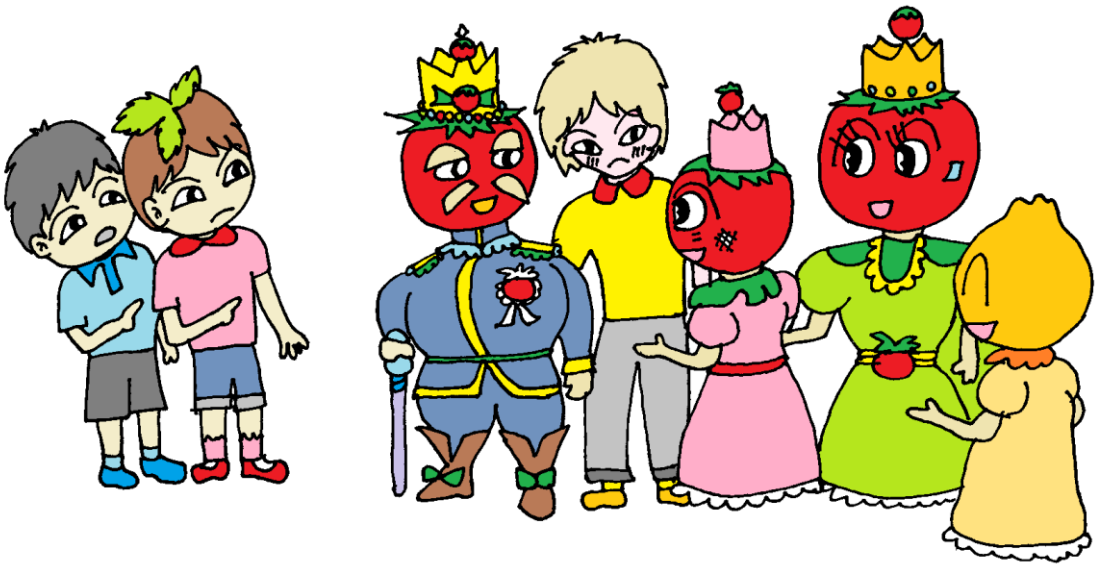
突然現れた神に住民は喜んでいます。レタを先頭にバーバラ、エイミー、トミーが続きます。ちょうどこのトナトンに来たときのことでした。レタがバーバラにすぐ後について歩くようにいったのです。

「そういえばトナとデコはどこへ行ったのかしら？」

エイミーはふと 2 人がいないことに気がつきました。5 メートル程の幅の道の両側には多くの住人が見守っています。少し歩くと広場に出ました。その真ん中は少し高く土が盛られ、その上に 10 メートル程の赤いドーム型の建物がありました。

『ようこそトナトン王国へ』

よく見るとトナは緑の葉に黄色の花の王冠をかぶって立っています。両脇にも同じように緑に赤の実のついた王冠をかぶったお父様とお母様らしき王様と王妃が立っていました。デコはその横に立っています。



「あれっ、トナとデコはあそこにいるよ」

トミーがいいました。レタを先頭に４人はその１メートル程のところまで進み、止まりました。

『お約束通りお連れいたしました』

レタは向かって一番左のお父様のような人にいいました。

『おぉ、このお方が！おぉ、本当じゃ。予言通りに目が青いトナ。あっ、いや失礼つかまつった。ワシはこのトナトン王国の王じゃ。こっちが王女とワシの妃じゃよ』

「お、おとうさま・・・？？？」

バーバラとエイミーはお互いの顔を見合わせていいました。

『で、レタどの、こちらのお連れは家来なのかな？』

「け、けらい・・・？おいらが・・・？」

『い、いや、ご友人の方々だニ』

レタがいい直しました。

「エイミー、おいらたちバーバラのけらいにさせられたよ」

トミーがエイミーの背中をたたきながらいいました。

「目の青い女性が予言の女神なのね」

「レタ君があの切り株に適当に書いたのにね、エイミー」

「しっ、内緒でしょ、それは・・・」

『ささ、王女とワシの間で皆に顔を見せてやってくだされ』

バーバラは王様と王女の間に入り、振り向いて皆の方を向きました。レタはエイミーとトミーは王妃の隣に誘導され、王様の左側に移動しました。

「おいらたちはただの人なのね」

バーバラは少し顔が赤く緊張しています。

『ささ、女神どの。お名前をお聞かせ願いたいトナ』

「バ、バーバラ、バーバラ・オリオンっていいます」

『おぉ、バーバラどの。オリオンという名も、3つ星の友人を表すのう。まさにそれも予言通りじゃ。皆のもの、バーバラどのじゃ!』

住民たちはますます歓喜の声を上げ、口々にバーバラの名を叫びました。

『バーバラ、バーバラ・・・トナ・・・』

『バーバラ、バーバラ、バーバラ・・・トン・・・』

歓喜の出迎えも終わり、3 人は先ほどとは別の今度はオレンジ色のドームの建物の中で休んでいました。レタだけが一緒にいます。バーバラはまだ緊張しているのか、口をま一文字に閉じたまま何もしゃべりません。

「バーバラ、なんか話したら？」

トミーがバーバラの顔の前に手をかざしていいました。

「バ、バーバラ、どうしたのさ？」

「なんか目が遠くの方を見てるわね」

「エ、エイミー、な、なんか言った？」

やっとバーバラが口を開きました。

「なんかいったじゃないよ。どうしたのさ、さっきからずっと黙ったままでさ」

トミーがバーバラの顔を近くで見ながらいいました。

「そ、そうなのよ。いきなり女神となったじゃない。もうなにがなんだか分からなくて、ボーっとしちゃったのよ」

「夢を見てるみたいな顔をしてるわよ、バーバラ」

「だって、わたしはエイミーと違い、ふだんは目だたないフツーの子だから、本当にビックリだわ」

バーバラはエイミーとトミーを見ていいました。

『本当にありがとう』

突然レタがいいました。

「でもレタさんの予言が当たったなんて、すごいんじゃい？」

エイミーがレタにいいました。

『て言うか、トナトンのみんなをなぐさめようと思って、金色の髪の青い目の女性が助けに来るって、オラッチが切り株に書いたんだ。それをトナが見てさ。君たちの世界に探しに行くことになったんだ』

「それであの噴水のところにいたの？」

エイミーがいいました。

「でもレタ君はいなかったんだよね」

『オレッチは林の中で番をしていたんだ。でもこの予言のことはトナとデコには話さないでね。秘密にしてんだニ』

「なあにレタ君、おいらの口はそんじょそこいらの岩より固いよ。男同士の約束は守るよ」

そこへ着替えを終えたトナとデコが入って来ました。

『バーバラ、エイミー、トミー、ありがとう。それじゃトナトンの街を案内するわ。デコもついてきて』

『じゃ、オラッチは少し休むのでトナとデコで行ってきてニ』

そういってレタは部屋を出て行きました。